

本草綱目

三十一

本朝醫談

全

の

奈須恒徳著

本朝醫問談 全



おのゝちからけちまゝくゝのまゝくゝぬまゝらゝいけり  
神代よりおゝりくゝ大己貴かたき名れこゝの  
流林をけりくゝたかた志のふふ平けきゝぬか  
世とありくゝ西条中もゝのゝことんほいふ  
おゝさゝくかゝくゝくゝ乃は信傳をてゝり  
以我のゝのみちきゝやまゝ久あゝのあゝおゝ  
るゝゝありくゝふふさゝいけり友のゝゝゝ恒  
恒坊めりゝ序さゝいのゝゝゝゝ國は始り

事なり其頃外國より耶菴の者も入来て病人の資なり  
華園の地をも信長も伊吹山五十甲四方を賜ふ彼其本園  
より藥草藥木三十餘種取せり今も此時の種今  
も残り又葉ハ南蛮種なり天教雜話に見ゆ

○萬葉集家持々哥復やまゝとてひさしとてめ  
復やまゝ唐土に注復病とてひさし一向麻瘦の事なり又  
注復病の食料も可然なりひさし唐より鰻鱺魚  
今つらとてひさしとて和名抄の説誤なりと東雅之辨れ  
と須醫抄骨蒸勞瘦鰻鱺を食ふ事を載てはひさしを  
とてひさしとてひさしとて補根と出る山椒魚の類

ぢり

○源氏物語月頃とてひさしとて極熱の草藥を服と  
大和本州韓夏月食之餅暑毒故とてひさしとて本文  
ハ草の性熱なる事をひさしとて韓蕪の類ハ下利を治とて  
物なりとてひさしとてはら下る事とて腹痛の文字也  
古人病ひとて瘡瘻の爲とてこれ等藥物を食とて肉毒  
忌の日數ひとて名けとて蒜間葱間並間とてひさし  
とて哥とてひさしとてひさしとてひさしとてひさし  
とてひさしとてひさしとてひさしとてひさしとてひさし  
とてひさしとてひさしとてひさしとてひさしとてひさし

本朝醫統

八

○珍貴の薬は求めづらくて得易く唐土の書に  
 する軍方 犬山椒の末打身をつくる うほほ草淋病に  
 煎服す 牽牛子の葉蜂蟄諸毒虫の毒を治す  
 はく 燈心丸く鼻をさすけり血をさす くらぬむ水  
 腫を治す 白梅花吐逆を治す 櫻の花蛇傷を治す  
 く 櫻の實魚毒を解す 嬰真の虫小児の疳に用ふ  
 無患子の皮小児吐乳の葉中に加用 鴛掌風松脂を焼て  
 薫す 柚の核黒焼す喉痺を治す 鹿頭黒焼癩  
 病に用 籠の黒焼湿毒疥癬を發脹と  
 經籠の黒焼喫閉を吹へる 野苴の根土用を取る黒焼は

て草麻の油を煉し一切腫物をつく毒深りれを治す毒  
 の浅は自落とす 諸骨硬竹木刺鳳仙花莖葉と松葉  
 等々黒焼酒を服す 竹木刺の治するは鯉節の末を  
 飯をまぜて押付す 黄柏を煎し砂糖を入る  
 如くありすく菓つめく痔の痛をぬる 梅瘡骨痛薬  
 海藻大牛膝中細茶小水煎服 鯨の油瘡腫を灸服  
 毒鼠咬狗傷を治すの煎汁を飲む  
 一切の痛薬に明礬十石百呷霜一石五分をやく海鹽をよくと  
 つく薬に 乾咳州殼をやく末糊丸用 昆布の黒や  
 口中一切牙齦の腫痛に用ゆ 昆布をやくへばくつちの代用を丸黒  
 焼する事泥を灰を交て封する時

本朝醫書

古